

月報

37号

発行所

青丘文庫

編集・発行★韓 哲 曦
〒654 神戸市須磨区須磨寺町4-3-1
メゾンド青丘ビル2階
TEL (078) 734-5989

北京図書館に朝鮮図書を捜す。

森川展昭

今夏 私は水野直樹氏と和田春樹先生と中国東北地方の東北抗日烈士館（ハルビン）延辺博物館、中国革命軍事博物館、北京図書館を見学してきた。昨年夏の中国東北地方の研究機関の訪問は指紋捺捺に関する学術調査団に加わったため、中国東北地方の朝鮮族の抗日闘争に關しての意見交換はほとんどできなかつた。このたびは中国東北地方の朝鮮族の抗日闘争史に的を絞って、上記の博物館や研究機関を訪ね、研究者たちと意見を交換した（指導を受けたといいたほうが正しい）。

ここでは、北京図書館を中心に話を進めて行きたい。

北京市の西郊外・紫竹公園の北、首都体育館の西に中国国立図書館—北京図書館がある。北京図書館がある海淀区はまた学園地区（北京大学、精華大学がある）でもあり、電子機器販売の中心街でもある。北京図書館（正しくは新館で、旧館は分館になった）は近代的な建物であるが、中国の伝統を取り入れている、屋根は両側がやや跳ね上がったような形になっており、青い瑠璃瓦でおおわれ、明るい灰色の壁は青空を背景にしたとき、いつそう引き立ち壯観である。敷地は42畝、建築面積は14万平方メートル、中央部の青庫塔は高さ61メートル、22階で周囲に416階建の建築が13棟取り囲んでいる。

北京図書館は1987年10月に開館した。まえの図書館（旧館）を合わせると敷地面積は17万平方メートルにもなり、世界第2位になり、アジア最大の図書館となる。蔵書総数は1300万冊で、収容冊数は2500万冊にもなるという。

水野氏と私は朝鮮文図書編目部の金菊賢先生（女）の案内を受けた。むこうがはるかに見えるといった感じの目録室で朝鮮文図書カードをみた。歴史関係、とくに抗日闘争史の部分をいそぎばやにみた。意外や意外である。想像していたより朝鮮の本が少ないのである。社会主義国朝鮮の本が少ないと感じた。わたしがたくさんあるとかつてに想像していたからかもしれない。文化大革命終了期までは南朝鮮の本がほとんどはいってこなかったという。目録カードをみても南朝鮮の本は代表的な本が見られるだけで十分とはいえない。それでもいままで見たことがない本もあつて、さつそく閲覧することになった。朝鮮民族統一戦線問題と抗日武装闘争時期長白革命根拠地などである。一冊しかない貴重な本は結局閲覧できなかったが、上記の本は金菊賢先生の配慮で複製しもちかえることができた。その後、金先生の編目室（日本の整理部）分類図書記号を与えラベルをつける）をみた。ただひとりの朝鮮図書館司書ではあまりにも寂しい感じがした。南朝鮮の本も経済的になかなか入手しにくいとのことであつた。

在日朝鮮人運動史研究会（二〇二回）例会報告

一九八八年六月一二日

兵庫県における

在日朝鮮人労働運動

（一九三〇年以降）

堀内 稔

一昨年十一月の例会で、一九二〇年代の兵庫県在日朝鮮人労働運動を報告した。今回の報告は、その続編とも言うべきものである。

兵庫県の人口は、三〇年代以降も増え続け、三〇年に一万六千人であったものが、三五年四万七千人、四〇年一万五千人、そして四五年には、一四万四千人に達した。

居住人口の増加とともに労働者の数も、当然ながら増加した。職業別にみると、無職を別にして、人夫、職工、雇人などが多く、三〇年代後半に入ると商業に従事する割合も増えてくる。

神戸の場合、産業の業種として大きな比重を持っていたのはゴム工業である。神戸のゴム工業の発展は、マッチ工業の行き詰まりの結果、その豊富な労働力がゴム工業に吸収されていったためといわれている。そして朝鮮人労働者の多くも、これに従事した。

三〇年代の前半は、労働運動が最も高揚した時期でもある。とくに三一年から三三年にかけて、ゴム工場を中心にストライ

キが続出した。劣悪な労働条件で働かされていた朝鮮人労働者も、積極的にストに参加し、待遇改善を訴えた。

もちろん、朝鮮人が関係した労働運動は、ゴム工業だけでなく広い範囲の産業にまたがっている。朝鮮人が参加した主な労働争議には、次のようなものがある。

鳴尾綿業組合、兵庫ゴム合名会社、山部ゴム、八千代ゴム製造所、兵神ゴム製造所、丸中ゴム工業所外二工場、峰泰ゴム、天狗ゴム、楠公ゴム工場、丸大ゴム、渡辺ゴム、平尾ラバー工業所、染川護謨工業所、御蔵ゴム製造所、北星護謨工業所、多木製肥所、岡本製塩、神楽ゴム、姫路市外高木橋工場、揖保郡栗栖村姫津鉄道トンネル工事、丸岩商会、月嶋護謨製造所、山栄ゴム、藤本護謨工業所、神崎ゴム工業所、兵庫ゴム製造所、藤原ゴム中底再製工場、太田製釘、島田護謨工場、明治製塩、堀抜製帽、日の出製塩、武庫川砂利

これらの労働争議は、労働団体がバックになつて指導したのも多かった。朝鮮労働組合が解消して参加した全協系の組合はもとより、全労、総評なども積極的に指導した。ただ、どの程度の指導が行われたのかについては、検討を要する。

問題となるのは、争議における朝鮮人と日本人の関係である。日本人の排他的な動き、あるいは双方の対立関係はなかったのであろうか。資料の関係から詳しくは分からないが、そうしたマイナスの側面を持つ争議は、少なかったようだ。

朝鮮民族運動史研究會

第715回例会報告

1988年6月19日

李景珉

「社会主義者にとっての

8・15」

解放直後の朝鮮において、ひとつの政党運動を本格的に展開したのは社会主義者たちであった。彼らは、他のいかなる政治勢力よりも強い組織力をもっていた。そして朝鮮社会に対するちみつの現状分析を行い、明確な政治路線を打ち出していた。したがって社会主義者たちは、またたく間に解放政局において中心的な役割をはたす存在となったのである。

朝鮮共産党が正式に再建されたのは45年9月11日である。ところが解放後いち早く「共産党」の看板をソウル市内にかかげたのは、李英・鄭栢・崔益翰などの「長安派」グループであった。これに対して朴憲永などの「コム・グループ」は、いくぶん遅れて党組織に取りかかった模様である。しかし朴憲永は、朝鮮国内に最後まで潜行し踏みとどまって強固な闘いをつづけていたこと、そして地下から台頭すると同時に自ら著わした「8月デーゼ」を世に問うことで、他のグループの追従を許さぬ存在となった。「8月デーゼ」は、朝鮮の共産主義運動の暫定的な政治路線を提

示した文献である。デーゼによれば、解放は朝鮮民族の主體的闘争によってではなく、進歩的民主主義国家の力によって実現したという。そして朝鮮の革命の現段階は、ブルジョア民主主義の段階にあり、当面の重要課題は民族的独立および土地問題の解決であると述べている。しかしそこには民族統一戦線の実現を具体的にどう進めるか、また過去における共産主義運動の欠点などについては、反省が充分なされていないとみられる。とはいうものの、同デーゼは、当時の状況のなかでいくつかの限界はあるが、朝鮮民族にひとつの方向性を提示した唯一の文献として注目される。社会主義者たちは、米軍を解放軍として迎えた。しかし米軍当局は、彼らを思想主義者として警戒したのみならず、朝鮮の保守右派勢力を多数登用することによって、その勢力を牽制しようとした。したがって、解放直後朝鮮民衆が誕生させた「建軍」、「人民委員会」の存在は、米軍当局によって無視されるものとなった。しかし朝鮮共産党は、米軍当局との対決を極力避けていた。両者が全面的に対立するようになったのは、46年5月初め、丁度第1次米ソ共同委員会が無期休会に入り、朝鮮問題の解決の見通しが暗くなると行くときであった。その後米軍当局は、「精版社事件」が起こると共産党の機関紙「解放日報」を停刊させてしまった。そして同年9月、再建1年目を迎えた朝鮮共産党は、中央幹部多数に逮捕状がだされている状況で生存の岐路にたたされていたのである。

☆新著図書案内

- 朝鮮農村の質的研究—1941— ソウル 駭江出版社 86年 6月
- 朝鮮米関係資料—1937— 農林省米穀局 “ ”
- 朝鮮の農村衛生—1940—朝鮮農村社会衛生調査会 “ ”
- 日帝下貧民関係資料—1・2—藤井忠治郎・木村正一 東京 岩波書店 35年・24年
- 朝鮮小作年報—2— 朝鮮総督府農村局 ソウル 駭江出版社
- 朝鮮農地関係年報—1— “ ” “ ”
- 農家経済概況調査 農村局農村振興課 “ ” 40年
- 大韓民国統計年鑑—1952年—大韓民国公報統計局
- 小作慣行調査書—1～6— ソウル “ ”
- 朝鮮経済統計要覧—1949年—
- 朝鮮農地年報 —1— 朝鮮総督府農林局
- 朝鮮農村研究の準備知識—1933年—袁 成龍 漢城図書株式会社 45年
- 朝鮮ニ於ケル小作ニ関スル参考事項摘要 朝鮮総督府農林局
- 農地改革統計要覧—1951年— 農村部農地局 ソウル 駭江出版社 86年 4月
- 歴史学報 第116輯 黄 元九他 歴史学会 87年12月
- 韓国美軍政史—国際小叢書1—国際新聞社出版部 駭江出版社
- 新朝鮮正業名鑑—1917年— 朝鮮研究会蔵版 “ 86年 6月
- ・韓国民衆運動史資料大系—農民戦争編— “ 85年～86年
- 美軍政法令集 (国文版) “ 83年12月

研究会後案内

- ・在日朝鮮人運動史研究会 第104回例会

日時 1988年 9月11日 (日) 午後2時

テーマ アメリカ戦時資料民政ガイド在日外国人について

報告者 金 英達氏

- ・朝鮮民族運動史研究会 第77会例会

日時 1988年 9月18日 (日) 午後2時

テーマ 中国訪問報告

報告者 森川 展昭・水野 直樹・飛田 雄一

・場所はいずれも青丘文庫にて